

## 老後生活の国際的比較

金 相 圭

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科

(平成5年11月17日受理)

### An International Comparison of Old Age Life

Sangkyu KIM

*Department of Medical Social Work  
Faculty of Medical Welfare  
Kawasaki University of Medical Welfare  
Kurashiki, 701-01, Japan  
(Accepted Nov. 17, 1993)*

**Key words** : industrialization, modernization, public pension, old age,  
international comparison

#### 1. ま え お き

グリムの童話「4つの動物」によれば、神は人、ロバ、犬、猿の4つの動物におのおの30年の寿命を均等に配当した。しかし、人だけはそれを不満にもっと長生きを願った。そのせがみに耐えられず、神はロバに寄ってみたらロバは「30年間の長い苦労には耐えられない」ということから18年の返納を願い出との事であったので、それを人に渡し、それで人は48年生きながらえるようになったが、これにも満足し得なかった人は、つぎは犬からの12年、その次は猿からの10年を加え、遂に70年を生きながらえるようになったとの物語である。

日本でも、1970年代に出た週刊朝日に「老害」という記事があり、そのサブテーマは「椅子にしがみついた偉い人達」となっていて、その内容は日本の30傑（与党の10人、野党の10人、財界の10人）をその出生時代別に分類すれば、明治

生まれは23人で77%、大正は6人で20%、昭和は1人で3%に過ぎないが、しかし総人口においては、明治生まれは15%、大正も15%であるのに対し昭和生まれは70%を占めていながら1人しか30傑に加わっていないという事である<sup>1)</sup>。

イギリスの経済学者クラーク (C.G. Clark) によれば、「資本主義経済の発展に伴って有業人口の比重は第1次産業から第2次産業へと移っていく。更に第2次産業に比べて第3次産業が次第に大きくなっていく。高次の産業ほど人当りの実質所得は高くなる。」との事である。

産業間の人口移動は産業地域間の人口移動に連がり、ひいては「都市化」、「核家族化」にも結びつく。日本での例を見れば1955年度の産業別人口構成は、第1次産業は41.1%、第2次は23.4%、第3次は35.5%であったが、30年後の1985年度には各々9.0%、33.0%、57.5%と大きく様変わりしている。

以上、3つの例は何れも老後生活に関わり、

マイナス要因として考後生活を脅かすものとなっている。

## 2. 国際比較調査とその経緯

日本は世界各国の高齢者の役割、諸活動及び意識等の調査を通して国際比較検討を行い、今後の高齢者福祉施策の推進に資することを目的とした国際比較調査を5年毎の追跡調査として、第1回調査は1981年に日本、タイ、アメリカ、イギリス、フランスを対象国として行なった<sup>2)</sup>。第2回は1986年に日本、タイ、アメリカ、デンマーク、イタリアを対象国に<sup>3)</sup>、第3回は1991年に日本、韓国、アメリカ、イギリス、ドイツを対象国にしている。第3回調査の資料によれば、調査対象者は60歳以上の男女、標本の基準数は1,000人程度としている。調査対象者の基本的属性において、年齢は60歳代が60%、70歳代が30%、80歳代が10%の比率となっている。同居家族類型において、日本は団地の3世代同居と夫婦のみの世帯がほぼ同率を占めているのに対し、韓国では3世代同居は最も多い。アジア2か国では単身世帯はごく僅かにすぎないが、欧米3か国では単身世帯がほぼ半数を占めている。親子同居率においては、日本は46%、韓国は51.3%であるのに対し、欧米3か国の場合は10%に過ぎず、単身世帯は、日本は5.6%、韓国は11.3%、欧米3か国は50%程度となっている。夫婦だけの世帯は、日本33.8%、韓国23.7%、欧米3か国はほぼ50%であり、単身世帯の場合は各国共に男性よりは女性が多く、欧米3か国では女性が男性の2倍になっている。

現存の子供の数においては、韓国が最も多く5人以上が50%を占めているが、他の4か国では2人が一番多い。教育年数においては、アメリカが最も高く11.5年、つぎはイギリス10.2年、ドイツ9.1年、日本8.9年となっているのに対し、

韓国は2.5年に過ぎない<sup>4)</sup>。

## 3. 親子関係

表1の「別居している子供のいる率」を見ると韓国94.5%と最も高く、次いでアメリカ82.3%、イギリス79.1%、日本76.6%、ドイツ64.1%となっている。別居の子供と会う頻度においては、ドイツは「殆ど毎日会う」が31.2%と高く、「週1回以上」と合わせると60.6%となってその頻繁性が覗かれる。アメリカ、イギリスも60%線にあって、欧米3か国は共に高い。一方、日本の場合は31.5%、韓国は22.9%とかなり低いものとなっている。

老後における親子の付き合い方についての意識においては、「子供や孫とは一緒に生活するのがよい」の同居交流型の支持率で、韓国は61.4%と最も高く、次いで53.6%の日本である。しかし、アメリカは3.4%、イギリス3.9%、ドイツ15.4%とその支持率は低い。反面、「時々会って会話や食事等をするのがよい」との別居交流型では、イギリス73.2%、アメリカ72.2%、ドイツ53.3%とその支持率は高い。

同居の場合、家族生活に役立っている役割は、各国共に「家事の担い手」としてが最も多く次は家族の「相談相手」となっている<sup>5)</sup>。

## 4. 夫婦関係

表2の「夫婦の時間と個人の時間」を見ると配偶者との生活関係において、各国共に「夫婦一緒に過ごす時間」が「夫婦各自の時間」を大きく上回っている。日本の場合は「夫婦一緒に過ごす時間」は42.3%で他の4か国に比べて低く表われている。老後の夫の家事分担の件においては、「妻と平等に分担すべき」がアメリカが59.6%と最も

表2 夫婦の時間と個人時間(配偶者と同居人)(%)

表1 別居している子供のいる率 (%)

	日 本		アメリカ		イギリス	韓 国	ドイツ
	第2回調査	第3回調査	第2回調査	第3回調査			
い	79.7	76.6	80.6	82.3	79.1	94.5	64.1

	日 本	アメリカ	イギリス	韓 国	ドイツ
夫婦一緒に過ごす時間をもつようになっている	42.3	65.3	55.2	59.6	65.8
夫婦各自の時間をもつようになっている	25.0	1.8	11.4	20.0	6.7
どちらの時間をもつようになっている	25.5	32.7	32.7	19.5	26.0
わからない. NA	7.2	0.2	0.8	0.9	1.5

高く、次いでイギリスの38.5%に対し、日本の場合は4.9%と5か国中最も低く表われている。夫婦間の協力において、各国共に「よく協力される」が日本59.2%、アメリカ73.3%、イギリス79.9%、韓国58.4%、ドイツ65.4%と高く表われるが、東洋勢は欧米勢に比べて低くなっている。「夫の世話による妻の自由時間の少なさ」において、「少なさを感じていない」がドイツ74.6%と最も高く、イギリスも70.0%であるのに対し日本は46.8%と5か国の中で最も低く表われている<sup>9)</sup>。

### 5. 老後の生活

表3の「老後の生活についてのイメージ」を見れば、アメリカ、イギリス、ドイツは「仕事から引退した生活」が35.3%、41.1%、40.0%と最も多く日本や韓国の場合は「健康が衰えた後の生活」が34.6%、39.1%と最も多い。2位のもは日本は「年金生活者としての生活」で28.4%となっているが、韓国の場合は「子供の結婚・独立後の生活」となって24.4%を占めている。これは、いわば孫ができて「お祖父さん」あるいは「お祖母さん」と呼ばれた時の事につながる。老人にとって大切なものとなると、「最も大切なもの」は各国共に「家族・子供」となっていることから、これからの施策においてこの辺のところは大いに参考にされるべきものといえる。2位のものとしては、日本と韓国は「財産」をあげている。「同年輩者に比べて幸せか」の質問に対して、「幸せである」が日本43.2%、アメリカ28.0%、イギリス21.0%、韓国14.4%、ドイツ10.6%となって日本が最も高い<sup>7)</sup>。

表3 老後の生活についてのイメージ (%)

	日 本	アメリカ	イギリス	韓 国	ドイツ
仕事から引退した生活	17.8	35.3	41.1	8.6	40.0
家事を人に任せた生活	4.0	3.3	1.6	7.1	2.1
配偶者と死別した生活	9.1	8.1	8.6	3.4	9.9
子供の結婚、独立後の生活	4.5	9.7	6.2	24.4	11.0
年金生活者としての生活	28.4	10.1	16.7	5.6	17.6
健康が衰えた後の生活	34.6	17.4	10.7	39.1	14.5
その他	0.9	9.2	13.0	4.7	3.5

### 6. 経済生活

表4の「老後の生活費についての考え」を見れば、ドイツ以外の4か国においては「自立」の意見が日本44.0%、アメリカ59.1%、イギリス47.6%、韓国43.2%となって最も多い。韓国では「家族が面倒をみるべき」が38.2%と高い数値にあることで注目される。老後生活における収入源に関しては、韓国以外の4か国は何れも公的年金が最も多く、80%以上がこの収入下にあるのに対し、韓国は公的年金はわずか3.4%にすぎず、子供からの援助が73.6%と最も多い。生活上の困窮度においては、「困っている」の場合、韓国が最も高く28.0%となって「少し困っている」を加算すれば59.7%となる。「困っていない」は、ドイツ67.9%、アメリカ55.1%と高く、日本とイギリスは40%線にある<sup>9)</sup>。

### 7. む す び

社会的地位は、Education, Occupation, Incomeの3要件によって左右され、Incomeの低い老後生活となれば、その地位は自然脅やかされるものとなってくる。しかし、聖書箴言第16章第31節の言葉「白髪は光栄の冠である。正しく生きることによってそれが得られる。」の如く<sup>9)</sup>、肝心なものは「正しい生活態度・知恵」であると思われる。ヘミングウェイの「老人と海」の末尾に「やがて陸地に着いて彼は自分の小屋に帰ってくると眠ってしまう。……老人は眠り続ける。……そして老人の夢の中に去来するのはあのアフリカのライオンの姿なのである。永遠に若く、永遠に力強く、にも拘らず絶対的に孤独な存在、ライオンの夢によって老人の孤独な戦いは完結し、後には静謐だけが残る」とかか

表4 老後の生活費についての考え (%)

	日 本	アメリカ	イギリス	韓 国	ドイツ
働けるうちに準備し他に頼らない	44.0	59.1	47.6	43.2	45.2
家族が面倒をみるべき	16.0	0.6	1.3	38.2	6.0
社会保障でまかなわれるべき	37.5	26.5	42.4	17.6	45.6
その他	1.3	9.1	7.2	0.6	3.0

れている<sup>10)</sup>。産業化、近代化、経済発展は人類に色々な恵みを持たらし、豊かにしてくれたが、今時老後を迎えた年齢層には「pieの配分」において不利な立場にあり、均分配当は期待され難いものとなった。しかし、老後とその後の死の

問題はやはり家族のものでもなく、国のものでもなく、各自自身のものであり、その窮極的責任は本人の責任下にあることから一層強いライオンの夢を必要とされるものと思われる。

#### 文 献

- 1) 週刊朝日10—2 (1970) 老害, pp 23.
- 2) Korea Survey (Gallup) Polls (1984) 韓国老人の生活と意識構造, pp 1 ~ 2.
- 3) 総務庁長官官房老人対策室編 (1987) 老人の生活と意識, pp 1 ~ 2.
- 4) 総務庁長官官房老人対策室編 (1992) 老人の生活と意識, pp 3 ~ 14.
- 5) 上掲書, pp 16 ~ 19.
- 6) 上掲書, pp 168 ~ 169.
- 7) 上掲書, pp 197 ~ 200.
- 8) 上掲書, pp 210 ~ 214.
- 9) 日本聖書刊行会 (1981) 聖書 (旧約) 新改訳, pp 990.
- 10) KENKYUSA (1990) E. HEMINGWAY, pp 160 ~ 172.